

「ノーベル文学賞を受賞」

カズオ・イシグロさんについて

本県出身の日系イギリス人作家、カズオ・イシグロさんが、2017(平成29)年12月10日(日本時間11日)スウェーデンのストックホルムでノーベル文学賞を受賞しました。受賞理由として「偉大な感性を持った小説によって、世界とつながる幻想的な感覚の下にある深淵を明らかにした」としています。

イシグロさんは、1954(昭和29)年11月8日に長崎市で生まれ、幼少期を長崎市新中川町で家族と共に過ごしました。1960(昭和35)年、5歳のときに海洋学者であった父がイギリス政府の招きにより国立海洋学研究所で働くことになり、一家でイギリスに渡りました。幼い頃のイシグロさんは毎年「来年になったら日本に帰る」と両親に言われ、いつかは日本に帰るものだと考えていたそうですが、中学生くらいに「もうこれは日本には帰らないんだな」とわかってきてイギリス人として生きることを決意し、1983(昭和58)年にイギリス国籍を取得しました。

20歳までロック・ミュージシャンを目指していたイシグロさんは、いくつものレコード会社へ売り込みを試みましたが夢はかないませんでした。1974(昭和49)年、セント大学に入学し英文学を学びました。大学卒業後、自分が何で身を立てるべきか考え始めた頃、偶然にもイースト・アングリア大学大学院の小さな募集広告を見つけ、1980(昭和55)年に同大学大学院創作学科に進み、文学と小説を学びました。その後、本格的に作家活動を開始し、第2次世界大戦直後の長崎を舞台にした最初の長編小説「遠い山なみの光」でいきなり王立文学協会賞を受賞。3作目の「日の名残り」でイギリス最高の文学賞とされるブッカー賞を受賞するなど、早くからその才能が認められました。その功績により大英帝国勲章やフランス芸術文化勲章を授与されるほど世界的に高く評価され、小説家としての揺ぎない地位を築いてきました。また、その作品は世界40カ国以上の言語に翻訳され、多くの読者を獲得しています。

イシグロさんの小説で一貫して描かれているテーマは「記憶」です。主人公たちが記憶を辿り、自分と世界の関係を見つめなおします。イシグロさんはある雑誌のインタビューで「人間は、記憶というこの奇妙なレンズ、フィルターを持っていて、成功した人間も失敗した人間も、過去を見るときにこのレンズを使ってイメージを操作し、過去を変える。記憶は人々が苦闘する姿を見つめる鍵になる」と語っています。

2015(平成27)年の来日講演の中で小説を書きたいと思っている若い人たちへのアドバイスとして「本が出版できなくても、作家というステータスが手に入らなくても、それでも書きたいと思っているのか。それに『イエス』と答えられなければ、作家にはなれない」と、厳しくも温かいエールを送っています。

イシグロさんは、ノーベル文学賞受賞決定後に中村知事へ送った手紙の中で「長崎での子供の頃の記憶は、小説家としての私のキャリアの基礎となっており、これからも、長崎は常に私の一部であり続けます」と記し、また名誉県民授与式では「わたしは長崎を完全には離れたことはありませんし、これからも離れることはありません」と故郷長崎への想いを語っています。さらに1945(昭和20)年に原子爆弾が投下されたことに対して「長崎は、我々すべてを脅かし続ける大きな脅威に警鐘を鳴らし、多くの地域間で平和を喚起するという特別な責務を引き続き担っていかなければいけません」と平和に対する長崎の役割を訴えました。今後もイシグロさんにとって、長崎は特別な存在であり続けることでしょう。

【カズオ・イシグロさんが執筆した主な小説】(2022年12月末現在)

- 1982年(昭和57年) 最初の長編小説『女たちの遠い夏(のちに改題:遠い山なみの光)』を出版し、王立文学協会賞を受賞。9ヶ国語に翻訳される
- 1986年(昭和61年) 『浮世の画家』を出版し、ウィットブレッド賞とイタリア・スカンノ文学賞を受賞
- 1989年(平成元年) 『日の名残り』を出版し、英語圏最高の文学賞とされるブッカー賞を受賞
- 1995年(平成7年) 『充たされざる者』を出版
- 2000年(平成12年) 『わたしたちが孤児だったころ』を出版
- 2005年(平成17年) 『わたしを離さないで』を出版
- 2009年(平成21年) 『夜想曲集』を出版
- 2015年(平成27年) 『忘れられた巨人』をイギリス、アメリカで同時出版
- 2021年(令和3年) 『クララとお日さま』をイギリス、アメリカで同時出版



(写真©早川書房Hiroshi Hayakawa)

「長崎の記憶が
小説家としての基礎を築いた」